

木陰で永眠 重荷残さず

墓建てぬ供養 広がる

少子化や経済的理由などから、墓を建てない供養が増えている。散骨や合葬墓など、費用が抑えられ、管理の心配もいらぬのがうけているようだ。自治体が管理する墓地でも採り入れ始めている。

「守る人がいない」

前橋市富士見町赤城山の赤城山麓に、民間会社の散骨場がある。山林の中にある30平方メートルほどの広さで、杉や桜の木が数本植えられている。

今月上旬、家族連れ6人が訪れ、小さいつぼに入っ

た、粉状になった遺骨をスプーンですくい、木の下に交代でまいていた。ピンクや白の花びらを添え、線香の煙が揺れる中、そっと手を合わせた。

遺骨は、3年前に84歳で亡くなった伊勢崎市の男性

のものという。

男性の長女(62)によると、男性は4人兄弟の3番目で墓はなく、遺骨をどうするか考えていたという。男性には1男3女の子どもがいて県内に住んでいるが、孫8人のうち6人は女性、男性2人は東京と岡山で暮らし、県内に戻る予定はない。「高価な墓を新しく造っても、将来、守ってくれる子どもがいない。頼めても負担にはしたくない」との考えから、墓を建てずに供養できるいい方法がないか調べたところ、山に散骨できることを知り、母親(90)らと相談して決めたという。

長女らは「山が好きだった父を供養するのに最高の場所。会いたい時には、散骨場へ来てしのぶこともできる」。母親は「自分が亡くなった時には、お父さんと同じところに遺骨をまいてほしい」と話している。

いう。

前橋市の散骨会社「やすらぎの郷」の塩野入純也社長(56)によると、墓がなく、自宅の仏壇などに遺骨を置いていた人は少なくない。最近では、一人暮らしの高齢者が介護施設に入る際、配偶者らの遺骨を持ち込めずに相談してくるケースもあるという。塩野入さんは「墓への考え方やニーズの多様化から従来の墓の形態にこだわらない見送りへの関心は年々高まっている」と説明する。

墓を造る場合、敷地や墓石の購入費や毎年の管理費

などがかかる。同社では散骨時に5万円程度。散骨場を整備し、昨年10月から受け付けを始めたところ、県内のほか東京や栃木、神奈川などからも問い合わせがあり、これまでに30件近くの散骨をしたという。

遺骨の墓地への埋葬について定めた墓地埋葬法では散骨の規定はなく、法務省は「節度をもって行われる限り問題ない」との見解を示している。県食品・生活衛生課は「住宅や水源地が近くになく、生活に影響がないようであれば問題ない」としている。



木の元に粉状の遺骨をまく遺族
前橋市